板一中だより

２０２５年６月２０日

学びのエリア７年生：１４１名　８年生：１１９名　９年生：１１７名　　計３７７名

板橋区小中一貫教育「板一中小中一貫学びのエリア」（板二小・板六小・板七小・板一中）

子どもの幸福度調査の結果をよみとく

校長　　伊藤　聡

先月、国連児童基金（ユニセフ）がOECD＝経済協力開発機構や EU＝ヨーロッパ連合に加盟している国々の子どもたちのウェル・ビーイングについてまとめた報告書を５年ぶりに発表しました。報告書における総合順位は、精神的な幸福度、身体的な幸福度、学力・社会的スキルの３つの分野の総合的な評価となります。

「ウェル・ビーイング」とは、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念です。もう少し分かりやすく言い換えると、体も心も健康で、社会の中での役割を果たしながら日々の生活が心地よい状況が続いているというところでしょうか。

さて報告書の内容に戻ると、全体としては、新型コロナウィルス感染症や世界規模の社会経済活動の抑制が大きな影響を与えており、３つの分野では著しい低下が見られ、全体のウェル・ビーイングは悪化し、その悪化の度合いは社会経済的状況によって異なっているという結果でした。

そのような中で、日本の結果に注目すると、総合順位が３６カ国中１４位ということから一見平均的な国のように見えるかもしれませんが、両極端の結果が混在する国であるとの評価になっています。具体的には、身体的な健康においては前回と同じく１位でした。子どもの死亡率が減少したり、痩せすぎの傾向ではあるが肥満が減少したりしていることが要因です。さらに、上の資料にはありませんが、スキル分野においては前回の２７位から１２位に大幅アップしていました。これは、多くの国で、子どもたちがパンデミック後に長い休校期間の遠隔学習で、基礎的な学力が急激に低下したことに対して、日本の学校では、学びを止めないための取組が、学力低下を最小限に抑えたことが要因として報告されています。つまり、日本は、新型コロナウィルス感染症の危機管理に成功した希な国の１つであり、基礎学力が上昇した少ない国の１つだということです。しかし、その一方で解決できていない重大な問題として、若者の自殺率が高まっていて、心の病の発生率も高いことが分かりました。

状況は複雑なため、日本の課題を単一の要因で説明することはできないと思います。どのようにメンタルヘルスを改善する方法を見いだすことができるのかが、これからの大きな課題として残されているようです。